
5リズム

あゆみかん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

5リズム

【Nコード】

N0248D

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【推理風なだけ／短編（読了約8分）】 おすすめかも
今朝の始まりから『終わり』までの間。『5』の連鎖が俺を襲う…
…作者が仕掛けた『5』の罠トラップワールドへ、ようこそ主人公！

(前書き)

推理小説……ではない気がする。

あくまでも、これはこんな小説なんだ。そして。

作者、相変わらずジャンル分けが苦手。適当もさじ加減が重要。

さあ解け！(適当)

朝。俺は制服のネクタイを締めながら、TV画面をたまたま見た。別に習慣づけているわけではないけど、ちようど……元気・パワフル・無敵の二本足直立歩行のキャラクターのゾウ「ミーナ」ちゃん（たぶんメス）が、つぶらな瞳でウインクしながら。今日一日の星座占いの結果を読み上げていた。

『顔を洗って、「5」に気をつけよう！』

俺に当てはまる星座は、そのように。

「5……？」

顔を洗うはいいとして、どうやって気をつけると？ ミーナちゃん。

「まあいい。遅刻する」

俺はサツサと鞆を持って玄関へ向かった。

玄関で座って靴を履いていると、妹のアキが、見ようによっては気味の悪いほど笑顔で やって来た。「お兄ちゃん。頼みがあるんだけど」

「何だよ」

「5000円貸して」

「却下。オカんに言え」

中学生の分際で高額な。高校生の俺ですら そんな大金、と感ずるんだぞ。

「ブー」「何とでも言え」

俺は玄関のドアを普通に閉めた。急がないと学校に遅刻する。

歩きながら気がついたのだが、「5000円」だったな……。

ただの偶然と、気にしすぎだろうけど。それを言ったら、さっきの占いだって7時55分だったじゃないか。……はは！ 何でもこじつけ論だ。

俺は携帯電話を いじりながら、早歩きで静かな住宅地を通り抜けていた。ここから学校までの距離は、徒歩15分ほど。こうやって携帯を いじりながら歩いていると、すぐに着ける。

メールボックスを見ると、ショッピングサイトから宣伝メールが届いていた。うつつうしいな。

『健康グッズ！ この冬ポツカポカアイテム・白の5本指ソックス！ 今なら、5%オフ商品！ なんと5足組525円！！』

「買わねーよ！」

つい声を張り上げてしまった。幸い周りには誰もいないは……ず？
「何を買わないの？」

ぎくり。子供がいた。

たまたま、俺は その子の横を通りがかったようだ。

子供は幼稚園児の格好で、黄色い帽子に黄色い肩掛けバッグ。胸のチューリップ型の名札に、「ふゆおか みゆう」と名前が。すぐ前の家の門の表札には、「冬丘 正・加代・未由」と書かれている。一人で、家の前に しゃがみこんで遊んでいたようだ。地面に『ゴレンジャー』の人形が落ちている。

5歳児……ゴレンジャー……。
どうにも、「5」が頭に付きまとう。

『「5」に気をつけよう！』
ミーナちゃんの愛想のよい顔が ついでに浮かぶ。消える！ エレファント！！

「ねーねー。何を買わないのさあ」
やけにこの子供は聞いてくる。どう答えてよいものか……。

「何でもないよ。じゃあな」

と、サツサと去ろうとした。しかし、歩き始めてすぐ横断歩道だったので立ち止まった。

信号は赤。

「お兄ちゃん。コレあげる！」

運の悪い事に、さっきの子供が俺を追いかけてきて また呼びかけた。手に何かを持っていて、「ハイ」と俺の前に見せた。

ちくしょう、相手にするのが面倒だなあ……俺は仕方なくタメ息をついた。

子供の手のひらを広げて見せたそれは、丸まった団子。素材は、粘土だろうか。

「食べちゃダメだよ？ ママがそう言ってた。怖い顔で」
「そりゃダメだろう。粘土なんだから。」

「いいよ、いらぬ。急ぐから、またな」

と、手を振るが……子供が、今にも泣きそうな顔をした。そんな顔をされても……。

俺は団子を手にとる。するとパツと、子供に笑顔が戻った。

「未由ちゃん！ どこなの一ー！！」

少し遠くで、この子のママらしき人の声がした。「そら、呼んでるぞ」と言っただげると、子供は「ハイ！」と元気よく返事をし、駆けて去って行った。

やれやれ。朝から子供の お守りなんて。

俺はフウ、と信号を見直すと、青になっていた。当然、横断歩道を渡ろうとする。

「おーい！ 広平！！ オハヨー！！」

渡った先には、クラスメイトの四矢 礼司が待ち構えていた。「おはよう、礼司」「昨日、広末玉生がよお……」

会って そうそう、アイドルの話をし始める。俺は あまり興味が無いので、黙ってえんえんと続く広末玉生の話を聞いていた。歩きながら そのうち、昨日観たTVの話になっていった。「イン

ドの計算方式っていうのがあってさ……」
アイドルよりはまだ興味が起きたので、「どんな？」と反応する
と、

「一の位が『5』の場合に限るんだけどさ。例えば……」

「ストップ!! その話は終わりだ。違う話にしてくれ」

俺は5、と聞いて過敏に反応しすぎた。おかげで礼司は驚いた顔
をする。

「何だよ急に……。ん？ お前、手に持っているソレ、何？」

と、礼司が俺の手を指さした。さっき園児にもらった団子。

ダン、「ゴ」……ね……。

ああまただ! 「5」! 「ゴ」! 「ゴ」!!

「何でもないよ。ちょっと調子がおかしいんだ」俺は力なく笑っ
て見せた。

「ふうん? ……わわっ、ととっ」

俺が見せたのを つまもつとして、礼司の指からスルリと団子が
落ちた。

トンッ、コロコロコロ……止まる気配を見せず、調子よく転がっ
ていく団子。俺はつい追いかけた。

キキキギギ……ッ!! ダアンッ!! ……

……

何が起こったのかが、わからない。

どうしたんだ? 俺………?

「広平ッ!!」

礼司の叫び声だ。

「キヤーーーーッ!! 人がッ………!!」

「誰かつ、救急車っ!!」

「人がトラックに ひかれたぞ!!」

あちこちで声がする。え? ……救急車? トラックに、ひかれた?
誰が……?

目を、開けた。

数字が並んでいる。「55-55」……四角いプレートに、そう。そうか わかったぞ。車のナンバープレートだ。そして、俺の視線と平行に数字が並んでいるという事は。

俺も この軽トラックも、横転もしくは倒れている。

「救急車を1台お願いしますっ。住所は、ええと……矢立市、叶

5 丁目ですっ」

声が聞こえる……ここ、5丁目かよ……。救急車は1台でいいぞ。

「私ですか? 石本弘史といます。ちょうど通りがかって……」

ありがとう通報してくれて。石本さんとやら。

「しっかりしろよ、広平! 今、救急車を呼んでいるからな」

あまり肌を感じないが、礼司が俺の肩を触って励ましてくれている。

「君、この子の名前は?」「北 広平です!」礼司が代わりに答えてくれる。

「頑張れ! 広平くん!! すぐ来るからね!」

サラリーマン風の男の人……声からして、通報してくれた石本さんだろう。

石本さんだけでない。何人かの人俺の周りに集まって、「しっかり!」「もうすぐだからね!」とエールを送ってくれていた。他人の俺なんかのために、皆が声をかけてくれる。俺の体はピクリとも動かないが、目に涙が にじんできていた。

どうして、こんな目に……。

「キヤーンッ!! 犬がッッ……!!」

突然、様子が変わった。

その場にいた全員が振り向く。声のした方を求めて。

「犬が……死んでいる……！」

その声で、空気が固まったように感じた。

俺を見ていた誰かが、どこかへ駆けて行く。「犬が!？」

俺のそばから人が消えたおかげで、俺の視界が開けた。数メートル先の向こうで、成犬が一匹、ダランと体を地面に預けた格好で倒れている。よく見ると、何かを吐いているようにも見えた。何かを食べたのか……？

俺はハッとした。

俺の手から、団子が消えている。

……一体、どこへ。

「おい広平。まさか あの団子、ホウ酸団子じゃねえ？」

礼司がズバリと言った。言葉が、矢のように俺の胸に突き刺さった。

ホウ酸。ホウ素。

原子番号 5。

……だったような……。

俺は目を閉じた。

もう、何の音も聞こえない。

……

「あーあ。死んじゃったね。北 広平くん！」

暗い闇の中で、似合わない明るい声が出た。ええと、姿がわからないが、誰なんだろう？

「もう一度、今朝からここまでを振り返ってごらんよ」

今朝からここまでを？ なぜ？ 振り返って、どうする。

「反省会よ。あなた、気がついてないわね。あなただけでなく、読者も」

読者？

「……コホン。とにかく、気がついてないだろうから、教えてあげるわ」

教えてあげるって、……何を？

「あなたが死なずに済んだ方法。今朝からここまでの間でね」

そうか……俺は死んだのか。何かと、「5」ばかりを気にしてしまつて……。いつそ、気にしなきゃよかつたんだ。アキの5000円はイタイが、子供の相手でも ちゃんとしてやればよかつたのか……それとも、通販の足指ソックスを衝動買いきだつたとか？ 「アハハハハッ！！ 違う違う。そんな事をして、結末は同じ。あなたは『5』にヤラされていたわ」

「5」の罠。「5」に翻弄され殺された俺？

どうしたら助かつたんだ？ 「5」の魔のルートから抜け出して。

……

少し、間が空いた。

「私の言う事を聞けばよかつたのよ。もう一度、今朝の始まりに戻つて」

少しトーンの下がった声だった。俺は少し怖かった。

「顔を洗って、出直しておいで」
プツリ。

それきり、声が途絶えた。辺りがまた暗い、静寂になる。
死ぬ前に、もう一度考えよう。

誰の言う事を聞けばよかつたって？ もう一度、今朝の始まりに戻つ……。……。

5 リズム

「顔を洗って出直しておいで」

ミーナちゃん。

そういえば、君だけが名前が。

《END》

(後書き)

【あとがき】

お読み頂き ありがとうございます。

……。

さて……

今朝の始まりに戻って。

作品中に表記された全ての名前の画数を数えてみて下さい。

仲間はずれは……

作者は関係なしです。

必要かどうか過去 長いこと悩みましたが【5リズム
をブログで書きました。

解説編】

<http://ayumanjyu.blogspot.com/2016/02/05/com/blog-entry-54.html>

何かスッキリしないんだけど、という方に。作者の言い訳が窺えます。

今作品は、あとがき修正されています(11/28)。
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0248d/>

5 リズム

2008年10月8日20時30分発行